

# Computer Report

Vol. 58 No. 7 7月号 (通巻 766号)

## はじめの言葉

■疑わしきは罰せずは、法廷判断における人事としてのギリギリの慎みである。政治家の立ち居振る舞いでは、この慎み方は通用しない。否、通用させてはならない。限りなく、疑わしきは必罰とするべきである。でなければ、時の権力者の横暴が蔓延る。人間の歴史は、これを教えている。まさに人間の歴史は人事の歴史である。その教えを機能させるため権力近くの中枢には至上の立ち居振る舞い、尊崇な気高さが求められている。

■安倍政権、そしてその周辺の立ち居振る舞いはどうか。論じること、思うだにすら、多くの国民がうんざりするものがある。周辺中核の中でも注目の加計幸太郎加計学園理事長が記者会見をした。それは、うんざりを遥かに超える不愉快なものだった。より正確に言えば、内容云々というより、人を喰った／屁バカにしたものだった。人間の尊厳を微塵も感じさせないものだった。これぞ安倍一族か。

■理不尽な誤魔化し／まやかしを積み重ねてのゴリ押し行為に対して人は、現状回復を求める権利を持つはずである。だとしたら、愛媛県今治市に開校された加計学園系獣医学大学は、それまでの交渉経過で明らかに存在した不実行為の積み重ねに鑑み、即刻廃校、すべてを元通りの状態、すなわち現状回復をするべきであろう。少なくとも、これまで注ぎ込まれた税金の返納を要求するべきだろう。嘘の付き徳を許すべきでない。

■昨今の流行り言葉のひとつとなっているのが「総合的に判断して」というフレーズがある。主に政治家の言辞だが、あたかも考えに考えを尽くしたような表現だが、安倍政権の答弁を聞き続けていると、ほとんど内容のない時の言い逃れ／言い訳言辞としか聞こえてこない。トドメを刺したのが、加計学園関係者の開き直り会見だ。文字通りの姑息そのもの、その場凌ぎ言辞の連続集だった。彼方にしたら「よくやった」ということか。

■一片の曇りがあってはならないはずの権力の側にある彼方が、最低ストレスの綱渡りの言い逃れをしている様は、国民側にとって、これほどの不幸はない。同じ政権政党にある集団の中に、こうした政権運営に疑問を呈する勢力が出てこないことも、その不幸をさらに深刻なものにしている。国民側の総合的判断として現在の政権政党を選んだことは承知している。その最終的責めを受け止めるのは国民の側である。噛みしめておきたい。

■奇しくも日本中を興奮の坩堝とした世界サッカー選手権での予選リーグで日本チームが決勝トーナメント進出を決めた。薄氷を踏む試合運びだったことを今、ほとんどの国民が共有している。最終盤での日本チームのプレイ内容で賛否両論。日本チームを引きいる西野朗監督の采配評価が注目されている。目先の1戦だけでなく予選リーグの3戦全体を思慮した上での戦略展開の結果だった。文字通りの総合的判断だったと言える。

■スポーツも単なる勝敗だけが評価される世界ではない。その戦いぶりも評価の対象である。その意味で、最終戦だけを見た場合、西野采配には否定的な見解が寄せられるかもしれない。しかし決勝トーナメントまでの3戦を如何に勝ち抜くかの観点でチームが一致団結していた姿を称賛したいし、ゲームに臨んだチーム全体としての判断／戦いぶりを評価したい。まさに、総合的に評価したい。(藤見)